青木の稲作・大溜池の始末

青木　酒井　暁

青木地区は、青木・清水・野首・中原の四小字の、寄り合いからなっています。明治初期の戸数は、和漢方医一名、下級武士（足軽）五、六戸、百姓四十戸でした。

藩政時代は、下級武士には、石高は与えられず、土地を与えられました。従って自給自足の方法でした。又百姓は、高級武士の小作をし、年貢米を収め、その残りで生計をたてゝいました。廃藩置県の時は、武士は知行地を、わが物にしましたので、百姓はやはり、小作人でしかなく、苦労を重ねて、土地を買い求め、自分のものとしてきました。

青木地区の水稲作は、明治の初期、安蔵・崩戸・五郎丸・池の向・青木・野首・中原・山王でしたが、明治の初め、小丸川の氾らんによって、安蔵・崩戸・池の向は流失しました。そのためその後は、水害のない所を選んで、水田としました。

しかし、青木地区は、台地になっていたため、度々干害に悩まされました。少なくとも五年に一度は、干害に泣かされました。そして余程多量の雨でも降らない限り、豊作ということはなかったのです。

青木地区の水田を潤す水源は、五十谷・耳切・北中原にありましたが、この溜池は皆小さいものでした。しかしこの溜池の水は、水田の五〇％は、潤していた様です。そのため干ばつの時は、溜り水も少なかったので、農民の節水は、大変うまく、下流に水田をもっている者は、夜中でも水引きに出かけました。水世話人は、毎日の様に会合を開いては、その対策に当り、又総ての者が協力し合っていました。

しかし昭和元年から、二年続きの干ばつで、もみの収かくは、反当一斗から二斗のところもあって、農民の困きゅうは、その極みに達しました。その時青年の間から北中原の増田氏の屋敷地が、溜池にするのに適しているので、この土地を買い入れ、大溜池を造れば、青木の旱ばつも、解決するのではないかと、意見が出され、このことが、世話人の耳に入りました。世話人は夜を徹して会合を重ね、役場に測量を願い出ると同時に、県へ補助

金の申請をするなど、大溜池建設実現への、努力が始まりました。青木の、農業の歴史を語る時、この溜池の存在を、見過すことはできません。

当時の世話人は、酒井松衛門、竹田正義、飛田正一、木浦伴吉、久保田仲衛門、久保田繁雄の六名で、当時の村会議員郡利三郎が、これを援助しました。これを聞いた青木の住民は、ひとしく喜びましたが、計画の途中一部より、異議が出て、中止しなくてはという雲行きになりました。

この時、酒井松衛門は、今をおいて永年の干ばつを、解決する時はないと考え、極秘の中に、時の村長橋口斌興に懇願し、事業成就に向けて、説得してほしいと頼みました。村長は、世話人を役場に集め、持ち前の大声で叱りつけると同時に、激励して、事業を進める様説得しました。叱られた世話人は、小さくなって帰り、再び会合を持ち、計画を実行することにしました。

もしこの時、酒井松衛門がいなければ、現在の大溜池は出来なかったのではないかと思います。またその頃の農作物は、米の外に金になる作物は、全くなかったので

青木の農業も違ったものに、なっていたかもわかりません。工事は上青木、下青木全員が出役となり、工事責任者飛田正一の指揮のもとに行なわれ、一日の賃金は、男六十二銭女五十銭以下で、従事することになりました。又水田を持っていない者も、日雇で協力するという申出があって、その時の仕事ぶりは、その後に、見ることの出来ないものでした。今のように機械化されているわけでもありませんし、総て人力に頼

りました。そのため大変な重労働で、朝八時から夕日の入るまで、男も女も、二人でかつぐ〃かご〃でかつぎ通しました。又地固めは〃サンヤ〃で、二人力を合わせてつき固めたものです。川南の軍馬補充部から〃トロッコ〃を、借りたりもしました。この様にして昭和十一年三月三十日完成し、青木一帯の水田を潤すようになったのです。

※　地区の人々の信仰と娯楽

明治の頃若者は、若者寄り合いをつくっていました。その寄り合いのリードで、村の神さん祭りをしました。天神様と厳島神社の祭りです。

お盆には寄り合い総会を、七月十三日に行ない、青木地区の規則を定め、青少年の不良化防止に努めました。農家には娯楽が少ないため、農閑期には神社参拝を計画したり、青年男女を中心にした、盆おどりが盛んでした。

大正頃までは、田の草とりが終わると、午前中位で農作業を終わり、午後はおどりのけいこであり、若者の交流の場でもありました。

夏になると、農閑期になり、村毎に氏神祭りが行なわれます。今日はこの村、数日後にはあの村と、次々に神祭りが行なわれ、親類同志が行き来して、交わりを密にしたのです。農家の娯楽と信仰は、一体となっていた様です。

正月が来ると自分の田んぼに、ユズリ葉を立て、田の神を祭り、七月になると〃ダギネン〃をし、各地区毎に日を替えて、盆おどりとなります。高鍋音頭をうたい、三味線、太鼓でおどり、やぐらのまわりを二重、三重に輪をつくり、夜を徹しておどったのです。ダギネンが終わると十五夜祭りです。その年の豊年を祝って、十五夜の晩におどり続けるのです。

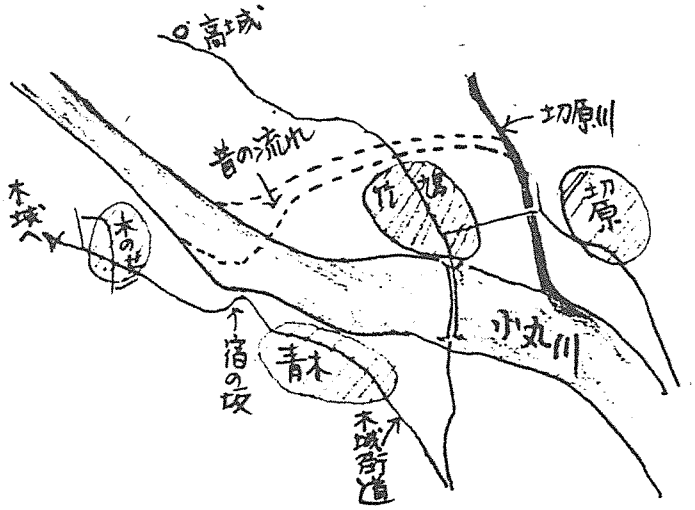
竹鳩のむかし

竹鳩老人クラブ

今から約四百年も前、木城町高城を中心に、大友氏と島津氏の戦いがあり、その十年後又もや、島津氏と豊臣氏が戦った。この二度の戦いの、古戦場の一部が竹鳩地区にあったが、二度目の戦いの後、この地は秋月氏の領する処となった。

ところで、その秋月家四代種政公は、大変狩を愛好されたという。ある日のこと、竹鳩地区にお出でになり、付近一帯に、竹林の多いことゝ、野鳩の多いことに興味を持たれ、その後も度々、狩にお出かけになった。その種政公は五十三才で、家督を種弘公にお譲りになったが、種弘公は父君以上に狩がお好きで、頻繁に狩にお出になった。

その頃にお仮屋（休憩所）を造られ、番入として武士の上野嘉助夫婦をおかれた。この武士が竹鳩住民第一号である。又狩がますます盛んになると共に、もう一人の鳩番として、馬まわり役の二男で坂本藤八を、上野家の南西に当る所におかれた。これが竹鳩住民第二号となった。



当時小丸川は、宿の坂下で曲り、木城境を流れ竹鳩の裏手で切原川と合流し、その合流点は、大きな淵となっていた。地勢も青木と地続きであったが、その後小丸川によって分断され、現在の様に変ったが、前記のお仮屋と神様のほこらが、竹鳩地区と竹鳩神社の起源をなすもので、又住民の上野、坂本両家は、明治初年まで続いた。又、竹鳩神社のことを、神武さんと呼ぶ様になった。日本の国の皇祖は、神武天皇であるから、それに因んで名付けられた様だ。春と秋に盛大なお祭りがある。

その頃、竹鳩の戸数は四戸だった。付近一帯は荒れ果てており、淋しい竹林、小松林の広がる原野だった。やがて水防工事が行なわれ、洪水毎に流れを変えていた川も、川田、青木と地続きだった竹鳩も、小丸川で分断された。その頃の交通は、船も橋もなく、洪水でもあると何日間も渡河できず困っていた。しかし戸数が少ないので、どうにもならなかった。

その頃宮崎県は暖かく、気候がよく土地が広く、作物がよくできて、人情が厚く且豊かである、という評判が流れ、ボツボツ移住者がくる様になった。それで大正十四年頃には十四戸になった。しかし未開の草原、竹やぶが多く、殊に安蔵地帯は松林が深く、狐や狸が生息し、人畜にいたずらするうわさが、しきりに聞えた。

当時、竹鳩青年会が結成され、上野政義が初代の会長となった。又その頃安蔵に、地区経営の舟渡しが始まった。船頭は常雇いであったり、地区民が交替で従事したこともあった。両岸に柱を立て、一番線の太い針金を張り、舟をあやつっていた。平常は楽であったが、増水でもすると、難儀はこの上もなかった。近くの人々は無料で、後から升米を集めていた。

その頃竹鳩の人々の暮しは苦しく、わずかの畑に大豆、トウモロコシ、甘藷、アワなどを作り、水田は一枚もなく、一部の人が隣接区に小作を求めて、水稲栽培をしていた。水田では、足踏み式の水車で、水を水田に入れるのをよく見かけた。大正七年頃、森弥太郎が池の水を、発動機で揚げ水田を開いたがうまくいかなかった。

当時の最も大きい収入源は、養蚕であった。その頃川田と高月に製糸工場があって、高鍋一帯は養蚕が盛んであり良質のマユが生産されていた。

大正十二年日豊本線開通の頃、竹鳩は二十二戸になっていた。

※　製糖工場

昭和二十四年に森弥太郎と長町義信が設立した。森は水車を動力とし、長町は発動機であった。当時は甘味料としての、砂糖の少ない時代で、各地に砂糖きびを栽培していた。それを買い入れたり、又委託加工していたが時期ともなると、終日付近一帯に甘い香りが漂よっていた。しかし昭和三十年頃には、市場に製品が出回り始めたため、工場を閉鎖した。

※　竹鳩共同作業場

竹鳩は貧困から立上がるため、地区民が結集して、農業生産の向上に取り組んだが、その意気込みはすさまじいものがあった。その一つが、共同作業所の建設である。最初は集会所として利用していたが、昭和八年頃県の奨励事業として指導もあり、時の地区長原嘉七が〃もみ摺り機〃を購入し、地区を移動して〃もみすり〃作業をしたが、次に精米、精麦、製粉、押麦の機械を設置し、盛大に事業を行った。時の作業主任は、黒木長造であったが応召したため、その後は地区の若者で運営し、昭和三十九年頃まで続けられた。

※　後がき

竹鳩地区は、前に述べた様に、全くの荒野であった。従って明治の頃から、今日に至るまでの地区民の苦労は並大ていのものではなかった。しかしその努力の賜物で、今日では戸数も六十五戸に達し、町内有数の農業地区となった。そして漸くにして他地区の水準までには達した様であるが、発展途上の苦しみに耐えながら、竹鳩地区を今日あらしめた人達は、あるいはゆき、又老いて次代へ譲っている。その労を称えることを忘れてはならない。

新山のおもかげ

新山　甲斐　甚吉

新山の歴史は古い様だが、古老もいないので、よくわからない。しかし現在の長老の話によると、大正初年の頃、大火災が新山・毛作・追分台地全域にわたってあった。

その後日露戦争当時、隊長だった田村某氏が、部下の杉原氏外十名を呼び、桑園造成開墾のため入植された。

又、田村氏は、わざわざ京都まで赴き〃猛宗竹〃を導入し、追分の原野に殖栽された。これが当地方界わいの猛宗竹林の元祖という。

当時の新山住民は蓑毛氏・坂本氏・橋口氏・桑島氏の四戸と、当座腰掛的の数戸だったという。大正三年から五年にかけて、四国より押条家一族や、細川家外次々に入殖者が相次いだ。

細川家の先代戸主は、信仰の対象となるものがないとさみしいと、四国に帰り、金比羅様を環受され、新山元地（現在は集会所北角）におまつりされた。

又一体の鬼子母神が、おまつりされているが、これは蓑毛家先代捨行氏が、消防団員として勤務中、現蓑先の消防機庫上の、がけの上に荒れ朽ちた祠があり、その中に鬼子母神がおわすのに気付き、桑島弁次郎氏と相談の上、台地で海が見え、眺望のよい元地へ、移転おまつりされたものといわれる。尚この年代は、金比羅神社をおまつりした以前であることは、確認されているが、いつかは明確でない。

その後の人口の移り変わりはいろいろあったようだが、多かった様に伺がえるが、廃藩置県当時は、宅地の所有者も三転、四転と変ったと聞く。大正中後期頃には、戸数もかなり増加し、地区外者との混成もあって、新山と新立の二つの組ができた。

しかし二組の間では、時折対立も起るようになったと聞いた。そして昭和八年頃から、地方の行政区が大字となり、新立の一部と富田追分の一部が分離され、新山に合併して、新山地区となった。それから大戦初期を迎えた。

昭和十三年頃から、当地も召集が始まった。予備役・後備役・補充兵と次々に応召出征となり、一時若い男性

は、皆無の状態となった。当時の新山の戸数は十六、七戸で、戦死者は七名であった。

終戦間近かになると、流言飛語が乱れとび、奇怪な事ばかり、見たり聞いたりした。昭和二十年六、七月の頃ある日の夜中に大音響があり、朝起きてみると、南前方の松の大木が、半ばよりポッキリ折れていた。又真夜中近くになると、大勢の人声とか、人を呼ぶ声、騒ぐ声などが聞え、山の上から谷底におりていく物音、又火玉や怪光物体の飛流は、数が知れない程あった。

終戦前で日時がはっきりしないが、当地区の爆げきもひどかった。千数個もの時限爆弾が投下され、爆発が数日間続いた。そのため気が狂って亡くなった人、腰が抜けて動けない人もあった。地面にはロート状の、大きな穴があき、森林は爆風で折れたり、吹き飛ばされたりして倒れた。又爆弾の破片が木にくい込み「新山の木材は製材せん」といわれた。

終戦後の台風はすさまじかった。家屋の七〇%が倒れ倒れた家の屋根を切り抜いて、出入口にして当座を、しのぐ程であった。完全にたっていたのは数戸だった。

昭和二十一年から、開拓者の入殖開墾が始まった。海外引揚げ、復員、分家などで、昭和二十三年までに二十一戸となった。そしてその年度に新山開拓組合が設立されて行政が二つになった。この頃から十数年間は、特に新山の生活は苦しいものであった。くる年も、くる年も、台風とか干害に悩まされ、特に昭和二十八、九年の寒害は甚大なものがあった。麦、菜種ほか冬作全殻が、収かくなし、又稲の播種制限も、当時農家にとって、忘れられないことの一つといってよかろう。それで救済物資も受け、又救済事業もやった。

開拓幹線道路工事が、一期二期に分けて行なわれ、その後昭和四十四年度から、落花生のポリマルチ栽培が始められたが、販路が思うにまかせず、途中で中止を余儀なくされた。したがって次年度からは、芳香南瓜、西瓜などと、作種は異なるけれども、今尚園芸クラブは続いている。又庭園用芝の栽培も行なわれたが、現在では数軒栽培されているだけである。その後落花生栽培に、県の指導のもと、補助金三十七万円が交付され盛んになった。とくに昭和四十五年がピークとなり、その栽培面積

は、十二町歩にも及んだ。

しかし現在、新山の主要産業は、何といってもブロイラー養蚕業である。次いで食用甘しょ、他地区からの入作たばこ、そして加工大根の栽培である。

※　羽根つき遊び

ひとめ　ふため　みよこしよめご
いつやのむすこ　七又八五ろし
ここのへここで　いったんおさめた

※　おじゃみ

おしろのさん
今のはやりの電気馬車
名古屋満州のおくさんは
かみはゆらゆら　まるまげに
足金足袋ゆすの上
ひい　ふう　みい　よう
とうまでかぞえておしろのさん

※　まりつき

ずいずいずっころばし　ごまみそずい
ちゃつぼにおはれて　とっぴんしゃん
ぬけたらどんどこしょ
かわらのネズミが米くてチュウ
チュウ　チュウ　チュウ
お父さんが呼んでも
お母さんが呼んでも
いきっこ　なあァしよ

※　まりつき

あんたがたどこさ　ひごさ
ひごどこさ　せんばさ
せんば山には　たぬきがおってさ
それをりょうしが鉄砲でうってさ
にてさ　くてさ　うまさのさっさ

※　手あそび

せっせっせェの　ヨイヨイヨイ
ここは島国　松の国
国を守るは兵隊さん
算術　読方いつもする
するがめいし　たがのうら
うらしま太郎は亀にのる
のるとすぐ出る汽車の旅
足袋屋の看板うれしいな
田舎の御馳走　そばうどん
どんどんパチパチ大演習
そこへ出て来る村すずめ
すずめのおやどは山の中

以上　新山　宇田タネ子

川田　財津モトエ

※　羽根つきうた

一とめ　二とめ　三やかし
四めじょ　五やのむさし
七また　八ごろ
九にきて　十まれ

川田　黒木喜美子

※　おじゃみ遊びうた

お一つ　おしゃらい　お二つおしゃらい
おみんなおしゃらい　おてじゃみおしゃらい
おちりんこおしゃらい
おひだり　おひだり
おわかれ　おしゃらい
中きり　つまよせ
しゃりんこ　おしゃらい
きりっとしょ
まめのこ　いりのこおしゃらい
小さな橋とおれ
大きな橋とおれ　おしゃらい

木ノ瀬　古江ミツ

※　手まりうた

さんのうの　おさる様は
赤いおべべが　大好きで
ててさん　ててさん
よんべ　エベス講に呼ばれていたら
たいの　吸いもん　鯨のはま焼き
一ぱい　おすすろ　すすろうの
二はい　おすすろ　すすろうの
三ばい目には
酒屋の権兵衛さんが　魚がないとて
おおやけ出したじゃないかいな
まずまず一かんかしました。

編集後記

★ 高鍋地方には、数多くの伝承文化がある模様で、機会ある毎に耳にしてきましたが、これまでにまとめられたものがなく、ぜひ収集してほしいとの要望もあり、社会教育課でまとめることになりました。収集については、高齢者生きがい事業のボランティラ活動として協力いただきました。収集発足当時は民話・伝説等が果してどの程度残されているのかと、危ぐもいだきましたが、ボランティアグループのお骨折りで、次々に収集されました。特に長老小椋美義先生ご夫妻の、ご支援並びに、高鍋史友会のご協力もいただき、数十篇に及ぶ伝承文化が収集できました。

こゝに資料提供者並びにご協力いただきました各位に対し深甚の謝意を表します。有難うございました。

★ 収集されたものは民話・伝説・物語り・由来・思い出・わらべ歌など多岐にわたっていますが、いずれもまことに貴重なものばかりです。全体を四部に分けて構成しました。内容的には分類がむずかしい点もあり、分類不十分になりましたが、ご理解の上ごらんください。

★ 編集に当りましては、つとめて原文をそこなわないように、加除修正し、小学校中、高学年程度の文章としましたが、尚むずかしい字句を残しています。さし絵はできるだけ多くし、又ユーモア的にと工夫し、親しみやすいように心がけましたが、思うような表現ができませんでした。

★ こゝに多くの方々の善意と努力、協力で完成いたしました、この一冊の伝承記録が、より多くの方々の目にとまり〃高鍋のふるさと心〃にふれながら〃新しい高鍋づくり〃の一助ともなれば幸わいです。

（編者　古江悦郎）